鉄人たちの夏

長良川国際トライアスロン　四半世紀

▶1◀

自分との闘い　楽しい

日比穂乃香さん（16）大垣南高1年

第二十五回長良川国際トライアスロン大会（日本トライアスロン連合、中日新聞社主催）が八月一日、海津市の国営木曽三川公園トライアスロン特設会場で行われる。この四半世紀、酷暑の中で多くの鉄人たちが限界に挑み続けてきた。節目の大会を前に、若手のホープ、アスリート、高齢者、運営を支えるスタッフらを取り上げ、競技の魅力を紹介する。

「きついけど、やっぱり楽しい。泳ぐのと走るのと自転車と、三つ一遍にできるのがいい」。真夏の炎天下、過酷なレースを笑顔でそう表現する。

大垣市の大垣南高校一年、陸上部の日比穂乃香さん（一六）は、一昨年、昨年と「長良川国際トライアスロン大会」のジュニアの部に出場。今年も出場を決めている。成績は決して良くはない。でも「マイペースにやっていくのが楽しい。ほかの人たちと競うというより、自分との闘い。『やりきる』という気持ちが大きい」と話す。

幼いころから体を動かすのが大好きだった。トライアスロンに出合ったのは小学校一年生のとき。同大会役員を務める母の知人に「泳ぎと走りと自転車、三つできるよ」と誘われたのがきっかけだ。

「何か楽しそう」。早速、小一の夏休みに長良川での「ちびっこトライアスロン」に出場。幼稚園の年長でやっと乗れるようになった自宅の「ママチャリ」をこいで、一番を取った。走った後の爽快感が忘れられない。

以来、スポーツクラブや部活などで水泳、陸上に励み、毎年、二、三会場の大会に出場。入学後は片道約十キロを自転車通学している。同じく小一からトライアスロンを始めた同市北中学校二年の妹、遥香さん（一四）も良き仲間だ。

「長良川トライアスロンは全国区でレベルが高い。緊張するけど、地元の大会ということで親しみもある」という穂乃香さん。ジュニアの部だけではなく、一般の部も一緒に開かれる大きな大会。過去二回の出場では、地元高校生のボランティアや役員、障害がある選手、高齢の選手、さまざまな人模様を目にした。「自分もずっとトライアスロンを続けたいと勇気をもらった。終わった後のシャワー、マッサージ、焼き肉は最高だけど、いろいろな人と触れ合えるのも大会の魅力かな」と思っている。

（小椋田紀子）

風を切って走る日比穂乃香さん。きつくてもトライアスロンは「楽しい」＝大垣市で